令和4年度 第20回 阿南工業高等専門学校参与会 報告書

1．日　時　　令和5年2月20日（月） 13時30分～15時30分

2．場　所　　阿南工業高等専門学校管理棟3階会議室

3．議　題

(1) 高専を取り巻く最近の社会的状況と本校の対応について
～さらなる入学志願者増を目指して～

4．出席者

別添のとおり

5．質疑応答

議題(1)資料について、本校関係者から説明を行った。
続いて、参与のご質問、ご提案に対して、本校関係者から取組等の説明を行った。

(1) 広報活動のマーケティングについて

○ 参与　　誰に対してどのようにアプローチを行っていくのかというマーケティングの視点が大事である。マーケティングの精度を高めるための戦略と戦術を作りあげるうえで、どういうターゲットにどういったニーズがあるかを深掘りする必要がある。これまでのオープンキャンパスの参加者を対象としたアンケート以外に範囲を広げる必要があるのではないか。ある自治体では TikTok のチームを作り、高校生や就職活動を始める大学生に対してアプローチしている例がある。ボリューム層に対して、どうアプローチしていくかを新たに検討してはどうか。

○ 阿南高専　　高校生に広く利用されている SNS である TikTok や Twitter などを積極的に利用し開拓していく必要があると考えている。ただし、学校としての運用となると学生に直接任すことが難しいことや、何を発信するかを検討しないといけないなど、検討課題が多いという点でハードルが高い。今後はホームページだけではなく、色々な SNS を使っての情報発信は必ず必要になってくるので検討していきたい。

○ 参与　　リーガルチェックなどの運用のあり方は非常に大事であるが、どこをどう尖らせていくかという視点を取り入れることも検討してはどうか。某会社の例を紹介すると、決算説明会資料を 10 代女性が作成し議事録を発信したところ、SNS で広く拡散されて多くの人から注目を浴びていた。賛否はあろうかと思われるが、どこをどう尖らせるかという観点で取り組みを進めていくのもよいのではないか。

○ 参与　　魅力化ということで様々な活動をされているが、高専の場合は進学した後の将来像が非常にクリアだと思う。その魅力をできるだけ伝えるのもいいのではないか。UGC（ユーザージェネレイティブコンテンツ）というキーワードがあり、Twitter などの SNS 利用者は、公式アカウントではなく、一般の人が発信している何気ない風景に魅力を感じているようである。学生や OB の方々が高専生活や、高専での学びといった高専の良いことを自ら色々な形で自由に発信していくことが実は注目されており、魅力が伝わるのではないか。

○ 参与　　現在、徳島県内の高等教育機関全体が取り組む共同事業で、入学者を増やそうという方向性がある。議論の中には、卒業後にどの仕事に就けて、どんな人になれるかという

ことを、もっと身近な情報として高校生に発信していきたいというものがある。実はこの取組が難しく、例えば風力発電を学ぶに当たっては、電気分野、建設分野、気象学などを学んでもいい。現在はハイブリッド的な考え方があり、ひとつの分野を学んでいても色々な分野に参加できる。大学や高専ではこの辺りが分割されるので、成りたいものがある学生に対して、成りたい分野とその他分野がどう関係するかを伝えるのは非常に難しい。今後、広報活動を進めるうえでどのように伝えていくかの課題に直面すると思うが、色々なニーズに対してトライしていただきたい。

(2) 中学校教員への広報について

○ 参与　　中学生が進学を決める時は、担任の意見が大きいと思っている。現在は普通科であっても、それぞれの学校が特色を出している。その中で自分に合う高校がない生徒の選択肢として、阿南高専が選ばれてもいいと思う。中学校の先生が生徒に勧める進路先の選択肢として意識してもらうために、阿南市内の小中学校の先生を対象に行っている広報活動を徳島市方面に広げてはどうか。

○ 阿南高専　　徳島県の人口は約 70 万人だが、京都市は 140 万、大阪市は 300 万であり、人口ピラミッドが同一とすると若年層の人口は多い。そんな中でも京都府、大阪府に高専は一校である。議題資料 4 ページのとおり徳島県の中学校の生徒数は減少していく。現状を考えると、徳島県に近く、来やすい京阪神を軸に受験生を増やしていくことを狙い目として、各方面と協力するしかないのではないかと考えている。また、ご意見いただいたようにSNSなどを適切に利用すれば、高専を知らない京阪神の中学生や保護者の認知度向上に繋がると考えられるため検討していきたい。

(3) 現在の広報活動について

○ 参与　　女子広報チームに関して、女子学生だけで構成されていることが気になる。女子生徒や保護者側の視点として、女性の先生や大人が参加すれば印象が良いのではないか。その方が保護者も安心するのではないか。女子だけというのはインパクトがあるが、実際には学校には男性もいるので、男性が参加し、女性だけが頑張るのではなく、女性と男性の一緒のチームで協力しているところを見せるほうが良いのではないか。

○ 参与　　科学技術アカデミーの一環で、阿南高専では小中学生向けの科学技術教育という出前授業を年間延べ 10 数回実施している。色々な体験の機会を設けたり、学校に赴いたりして小中学生に科学技術へのきっかけ作りの工夫というのは、将来的に生徒が減少するなかで今後も重要と思う。引き続き、学生獲得に向けて科学技術へのきっかけ作りといった事業を推進してもらいたい。

○ 阿南高専　　小中学生向けの STEAM 教育の実施においては、徳島県の科学技術アカデミーを利用させていただく。STEAM 教育により技術者を指向する小中学生を増やし、 その結果、高専の志望者数を増やしていきたい。また、徳島大学では STEAM 教育のオンライン講座を準備されているため、本校も同様に用意してこの講座を受講することで、受験機会に繋がるよう今後検討していきたい。

(4) 奨学金制度について

○ 参与　　大学時代に奨学金を借りて、卒業後、働きながら返済が終わるのに 10 年から 20 年掛かかるという新入社員も多く、学生やその家族にとって奨学金については非常に重要だと思う。資料を見ると給付型の制度は多いように見えるが、対象者の人数が少ないのでは

ないか。

○ 阿南高専　　本校で利用されている奨学金制度は、活動報告書の 16 ページから 17 ページに記載している。独自の奨学金制度は、日亜化学工業様から、今年 1 月時点で月額 2 万円を 140 名の学生に対して約 4000 万円を支援いただいている。また、ジャパンコミュニケーション様から、 昨年度は 1 名、今年度は 2 名の専攻科生に学業への支援をいただいている。昨今のコロナ禍の関係でアルバイトができない学生など、経済的に厳しい状況下にある学生に対しての奨学金も用意している。

○ 阿南高専　　大学に比べて高専の授業料は安く、専攻科にあっては大学と同様に学士を取得できる課程だが、大学の授業料が半期 20 万強に比べて高専は 1 年間で 20 万円強である。また、寮費については、家賃が月額 700 円、食費は 1 日 1,000 円であるなど、一般の大学生に比べて修学に係る費用は安い。奨学金の対象者数は、絶対的に見ると少なく感じるが、組織が小さく学生数も少ないため、支援が必要な学生には奨学金を利用してもらいやすい環境となっている。

○ 参与　　経済的な理由で修学を諦めることがないように PR に取り組んでいただきたい。

(5) 徳島県内の高等学校での取り組みについて

○ 参与　　今回の議題内容については、県内の高等学校が抱えている状況と同じである。各高等学校も自校の魅力化、特色化に向けてさらに取り組んでいる。特に普通科はノーマルなカリキュラムが多く、生徒を大学に進学させることがこれまでの方針だった。これからの時代は、普通科も専門高校以上に特色、魅力を作って発信していかなければならない。そうすることで、中学生が適切な進路選択をできるようになり、入学した生徒が自校に誇りを持ち、知識だけではなく、主体的に学び、問題を解決する力をつけるという狙いがある。今年度、教育委員会に高等学校の魅力化推進委員会を立ち上げた。民間企業、NPO 法人、小中高等学校、市町村教育委員会及び大学の関係者といった様々な方の議論の中の 1 つの課題として、中学生にいかに届けるかという発信力の問題があった。高等学校ではホームページの更新回数年間 100 回というのは沢山あるが、中学生には届いていない。なかなか良案はないが、機関誌の作成や体験入学など、ワクワクするような情報を届けることが大事だとの議論になっている。また、文部科学省がコミュニティスクールを推進しており、徳島県でも小中高等学校、特別支援学校に令和 4 年度中にコミュニティスクールを整備することになっている。従来の学校評議委員会では、様々な取り組みへの意見やアドバイスをいただいていたが、コミュニティスクールではもう 1 ステップ踏み込んで委員であっても自ら授業や講義を行い、生徒を委員の所属機関へ案内することができ、また、教職員配置にも意見が言える制度となっている。地域の自治体、大学、中学校、地域の有識者など、様々な方が各コミュニティスクールの運営協議会の委員となっている。 もう 1 つの方策は、一人一台端末の活用である。eスクール構想と言われており、全国的に小中学校に整備されたが、徳島県は独自に高等学校にも費用を措置し端末を整備している。一人一台の端末を使用した授業のほか、これを活用した探求活動が重視されており、自ら課題を設定し、解決法を見つけて、場合によってはコミュニティスクールに参加した自治体に提供することを行っている。まだ課題は多いが、一人一台の端末について魅力化、特色化の１つとして使用していくことを議論している。

(6) スポーツ・文化活動について

○ 参与　　最近、高校でゴルフクラブができてきている。野球やサッカーを経験する学生が多いが、社会人になった時に会社に野球部やサッカー部がなく、腕前を発揮できないことが

多い。ゴルフだと会社に入ってからスポーツを通してネットワークが作れる魅力がある。阿南高専でも教育の他にもスポーツを通して、人間力を上げていく工夫もあっては良いのではないか。

○ 阿南高専　　スポーツについて、活動報告書 15 ページのとおり、最近目立って活躍しているのはサーフィン、スポーツクライニング、ボーリングといった個人競技であり、総合体育大会や国体に出場している。ゴルフクラブは、かつてゴルフクラブで活動された教員が着任したため、活動が広がり繋がればと考えている。

○ 参与　　技術力を兼ね備えることは大事だが、人間力の向上も生きていくうえで非常に大事である。人間力の向上にはスポーツクラブに限らず、文化部の活動に力を入れていく必要があり、人間力を備える、育てるためには読書が重要である。阿南高専の図書館の使用率や学生の読書率はどうか。

○ 阿南高専　　今年度図書館は、ビブリオバトルを盛んに行っており、阿南市内の図書館で地域の方同士のビブリオバトルも行った。また、国語の授業で読書を 10 分ほど取り入れること、今年読んだ本のベスト本の紹介などに取り組んでいるため、学生は比較的よく本を読んでいると認識している。

(7) 自治体との連携について

○ 参与　　阿南市は未来への投資に重点を置く中で、5 つの方針と 11 件の重点取り組み項目を設け、ゼロカーボンシティとしての脱炭素に向けた取り組み、デザイン思考に基づくメディアイノベーションとして中心市街地の街づくりを行い、エリア全体の価値を高めていく取り組み、生物多様性の戦略の取り組み、行政のデジタル化への取り組みなどに予算の重点配分を行った。阿南市が目指していく方向性や地域課題と、高専が目指している地域課題の解決は親和性が高い要素が沢山あると考えており、阿南高専の 5 コースそれぞれにフィールドワークとして取り組める題材に溢れている。また、学生に向けて夢のある企画を考えており、富山県の南砺市では学生に 1,000 万円を預け、ただ 1 つ地域課題の解決に繋がること、みんなが幸せになることを目標に自由に使ってくださいとした取り組みがある。阿南市でも、例えばふるさと納税の寄附金を利用して、若者が夢のあることを企画できる可能性はある。これらを広く広報していくことが夢のある町、夢のある高専だなと思ってもらえることに繋がっていくと考える。

(8) 阿南工業高等専門学校教育研究助成会（ACT）との協力活動について

○ 参与　　少子化の問題と阿南高専の入学志願者の減少は、高専の問題だけではなく、ACT 企業にとっても極めて大事で深刻な問題であり、高度技術者を必要としている我々にとっては、これからも入学志願者を維持して優秀な技術者を輩出していただくことは重要である。これまで中学校以上の支援をされたなか、最近は小学生または就学児童に至るまでの広報活動に取り組み、負担はあると思うが ACT 企業としても支援していくので、今後も引き続き、入学志願者の維持にご尽力いただきたい。なお、入学志願者を維持し、もしくは増加するためには教育研究のレベルを上げていくこと、クラブ活動を通して発信力を高めていくことが必要と考えている。

○ 参与　　ACT の取組として、卒業生から創業者を輩出するため、日亜化学工業株式会社様に講師をお願いして 3 年前から物作りの基本になる知財教育を始めている。さらに ACT 企業から研究開発の課題をいただき、企業や地域の課題を教育者と企業と学生が参加をして解決していく活動を支援している。昨年 4 月に開始した東京大学と阿南高専による事前防

災の取組については昨日発表会があり、阿南高専の提案は東京大学に引けを取っていなかったと思っている。最近では脱炭素について阿南高専で研究ができないかという提案がある。時代の変遷の中で研究課題が企業側にも出てきており、学校として地域課題に取り組むというミッションからすると、地域や企業と共同で活動することが重要な時代であると感じており、今後も支援していくため、ぜひ一緒に取り組んでいただきたい。

(9) 同窓会について

○ 参与　　同窓会としては、卒業生への助言、仕事の相談などのバックアップ体制を徳島支部、関東支部、関西支部の三つの支部が連携して実施していきたい。現在は、卒業生をバックアップする同窓会の認知度が低いため、今後は同窓会が阿南高専の強みと言われるように取り組んでいきたい。

最後に、議長から本日のまとめの発言があり、続いて校長から謝意が述べられた。